

(書評)

森田喜久雄 『古代王権と出雲』 (同成社)

宇佐美正利

本書は同成社古代史選書十二として刊行されたもので、著者の森田氏にとっては、『日本古代の王権と山野河海』(吉川弘文館)・『やさしく学べる古事記講座』(ハーベスト出版)に続く三冊目の単著となる。

周知のように森田氏は、大学院終了後の一九九五年四月に島根県に就職し、島根県古代文化センター・島根県立古代出雲歴史博物館などに勤務しながら、島根県の古代文化に関わる調査研究や情報発信の業務に従事していた。そして二〇一四年四月に開学した淑徳大学人文学部教授に就任し、歴史学科長として現在活躍している。

「はじめに」で著者は、島根県での勤務の時に、「無知な学芸員を叱責するような激しい言葉に耳を傾けながら、私は研究者と一般の方々との間に横たわるあまりにも大きな溝をいつも感じざるを得なかった」「研究者は、必ずしも一般の方々の知りたい疑問には答えていない」「だが、博物館の学芸員の相手は、研究者だけではない。博物館がすべての人々

に開かれた存在である以上、一般の方々が知りたいことに答えなくてはならない」、そこで「出雲が古代王権のなかで果たした役割はどのようなものであったのか」について検討を加えたものが本書である。

本書の構成は第Ⅰ部「二つの出雲神話」再考」、第Ⅱ部「古代出雲の歴史的展開」からなり、第Ⅰ部は五章、第Ⅱ部も五章で構成されている。以下に、それぞれの章・節について具体的に記述してみる。

第Ⅰ部 「二つの出雲神話」

第一章 補完し合う「二つの出雲神話」

- 一 「二つの出雲神話」論
- 二 『古事記』・『日本書紀』のなかの出雲に関わる神話
- 三 『出雲国風土記』の神々
- 四 『出雲国風土記』の「所造天下大神」の神話

五 補完し合う二つの神話

第二章 ヤマトノオロチ退治神話成立の歴史的条件

一 ヤマトノオロチ退治のもつ意味

二 オロチ退治神話成立の歴史的前提 — 斐伊川上流域の開発主体 —

三 『出雲国風土記』にみえるスサノヲの活動

四 王権神話と国造家の神話

第三章 国譲り神話と出雲

一 国譲り神話をめぐる諸説

二 国譲り神話の舞台「多芸志之小浜」

三 古代出雲における「多芸志之小浜」

四 新墾の地、出雲

五 国譲り神話成立の 歴史的前提

第四章 「所造天下大神」の狩獵神話とその背景

一 穴道郷地名起源伝承の再検討

二 猪と古代社会・古代王権

三 猪狩伝承の生成空間と穴道郷の歴史的環境

四 「所造天下大神」神話の成立

第五章 国引き神話と「藺の松山」

一 潟湖と地域社会

二 古代地域社会における「藺」のイメージ

三 「藺の松山」における生業

第Ⅱ部 古代出雲の政治勢力

第六章 古代出雲の政治勢力

一 「出雲」という地名の由来

二 古代出雲の政治情勢をめぐる研究 — 東西出雲論 —

三 第三の政治勢力存在の可能性

第七章 古代出雲西部の政治勢力

一 「五賢」貢納手段の居住空間

二 朝酌郷の景観と生業

三 境界領域としての朝酌郷

第九章 古代王権と出雲国造

一 出雲国造と杵築大社

二 神賀詞奏上儀礼 — 天皇の聖性を補完する出雲国造 —

第十章 律令国家の成立と山陰道諸国

一 山陰道諸国の成立と地域社会の再編

二 中国山地を舞台とした交流

三 「北ツ海」を舞台とした交流

四 山陰道の理念と地域社会

第一章は『古事記』・『日本書紀』の「出雲神話」と『出雲国風土記』の「出雲神話」について、前者の成立については前提となる歴史的条件としてヤマト政権による出雲開発の可能性を指摘し、後者については出雲国造家の論理が色濃く反映していると指摘して、『出雲国風土記』は

独自のイデオロギーによって記紀神話に対抗したものではないと結論づけている。近年の「出雲神話論」に対する著者の独自の見解が主張されている。

第二章は従来スサノヲのヤマタノオロチ退治神話について、斐伊川の治水やタタラ製鉄集団による抗争が反映されていると考えられていたが、そこには出雲山間部に対するヤマト王権の開発という新視点を打ち出し、『出雲国風土記』の神話とは、出雲という地域社会の神話というよりも、「出雲国造のための神話」とみている。またスサノヲを完全に抹殺できなかったのは、スサノヲが王権神話のなかに組み込まれたこともあるが、それ以上に「出雲山間部」という地域社会が、出雲国造にとって無視できない場所であったのではないかと推測している。第二章も従来の研究ではそれほど重視されていなかった出雲山間部がヤマト王権・出雲国造にとっての重要な地域であったことを指摘している。

第三章は国譲り神話の交渉の場である「稲佐の浜」に対し、国譲りの交渉が妥結した場である「多芸志之小浜」では、ヤマト王権の山野河海支配に関わる儀礼が行なわれた可能性を指摘している。そしてヤマト王権の斐伊川流域への進出は、単に出雲一国の支配にとどまらず、斐伊川を遡上して山越えすれば、最終的には吉備に至り、さらに河口部分から「神門水海」を出れば、筑紫・越・朝鮮半島などに繋がる海の道が開けているからであると結論づけている。出雲と筑紫・越・朝鮮半島などとの交流は、かなり解明されてきてはいるが、出雲と他地域との交流の解明は出雲古代史研究にとっては重要なテーマの一つである。筆者の「多芸志之小浜」の場としての政治・宗教的重要性の指摘は、これからの実

証が必要である。

第四章は意宇郡宍道郷の地名伝承の再検討を行い、『出雲国風土記』意宇郡宍道郷条の宍道郷の地名の由来では、「所造天下大神」が追いかけた猪や犬の像があることを理由にしているが、宍道郷が「所造天下大神」の猪狩の舞台になったかについて言及されていない点にふれ、その理由として宍道郷の歴史的環境をも視野に入れて考察すべきであると説く。そして『古事記』・『日本書紀』の雄略天皇が葛城山での猪狩伝承についてふれ、「治天下大王」に通ずる「所造天下大神」にとつても、「天下の下」を統治するためには、猪は戦いを挑む対象でなければならなかったとみて、また葛城山における雄略天皇と一言主神との邂逅は葛城山が境界領域であったと推測し、宍道郷も出雲国内の東西両勢力の境界領域に存在していたと結論づけている。葛城山が境界領域であったというのは筆者の推測であるので、今後の課題として葛城山が境界領域であったことが実証されないと、宍道郷が境界領域であったことも照明されないのではない。

第五章は出雲西部の「神門水海」と「北ッ海」（日本海）との間にある「藺の松山」についてふれ、この「藺の松山」は国引き神話にみえる「藺の長浜」のことで、「藺」は水上交通の要衝に位置していて、そのため出雲国造や杵築大社にとって、領有すべき重要な空間とであったため、記述されたと考えている。続けて「松林」や「藺の松山」における生業と上長浜貝塚の動物遺存体を分析して「藺の松山」は山野河海の産物を獲得することが可能な豊かな空間でそこには集落が存在していたとみる。

第六章は「出雲」の地名由来に関する諸説を整理し、「出雲」の初見史料は、鰐淵寺伝来の銅像観音菩薩立像の台座の框の「壬辰五月、出雲国若倭部臣徳太理為父母作奉菩薩」で仏像の様式を白鳳仏とみて、壬辰は持統六年(六九二)とし、また六世紀後半築造の岡田一号墳出土の「額田部臣」銘入大刀からヤマト政権が出雲に部民制を導入したのは六世紀後半と推定している。このように文献史料だけでなく考古学的資料を多く用いている点に本書の特色がある。本章の結論は、「本章では、古墳時代後期の段階において、出雲は東西だけでなく山間部にも独自の勢力が存在した可能性指摘したい。そして、ヤマト政権は、まず山間部の勢力と手を結びながら東西出雲に進出したと考える」と結論づけている。

第七章は『出雲国風土記』の「新造院」の造営者について神門郡では造営者の名前が明記されていない点について、「等」の用例を分析して、神門郡の「新造院」の造立には複数の氏族が中心となり、広範囲な知識が結集した可能性を示唆している。さらに神門郡朝山郷・古志郷の氏族について「出雲国大税賑給歴名帳」から朝山郷・古志郷の氏族は神門臣・刑部臣が必ずしも多くなく、若倭部・日置部・吉備部・勝部など様々な姓がみられる。このことは各地から多くの人々が移動してきた事実を示しているのではと推測している。さらに斐伊川・神戸川流域の伝承を分析して、出雲西部では閉鎖的な地域社会のなかで政治勢力が結集したのではなく、様々な地域から人々が集まってきた。その背景にはヤマト王権の関与があったと想定している。

第八章は島根郡朝酌郷に関し『出雲国風土記』の地名由来を説明し、熊野大神に捧げる「五贄」については「新穀」と「水産物」の二説があ

るとし、「五贄」とは何か、また朝酌郷が「五贄」献上の場として選ばれたのか、そして朝酌郷は現在のどこか、などを『出雲国風土記』を通じて説明している。また『出雲国風土記』の「朝酌促戸渡」・「朝酌渡」について多くの活字本・写本を校訂することにより「朝酌促戸渡」は「朝酌促戸」とするべきであるとし、朝酌郷とそのなかに存在した渡しは、まさに出雲国造の本拠地であった意宇郡郡と対岸の異界のクニグニとを結ぶ境界領域であり、出雲国造は出雲国内の交通の要衝とともに、小地域のクニグニの境界領域をおさえていたのであり、そこに「出雲国造の権威と権力の源泉があった」と結論している。他の章もそうであるが、二十年近く県職として島根県に勤務していた著者にとって、出雲の地名・産物などは観念として理解しているのではなく、まさに身体で理解しているので、このような解釈が可能になってくるのである。

第九章は「出雲国造神賀詞」の解釈を通じて、出雲国造は単なる出雲一国の国造、列島の地域社会に存在した国造の代表でなく、天皇の聖性を補完する存在であったとみている。この性格は古代で消滅したものでなく、後醍醐天皇の隠岐脱出まで存続していたとみる。この観点から「杵築大社こそが、ヤマト政権による出雲開発のモニュメントであり、出雲を舞台とした神話を具現化したものであること、そのことを天皇は理解していたのである」と述べているが、この部分こそが本書で著者が主張したかった点ではないか。

第十章は『先代旧事本紀』の「国造本紀」記載の山陰地方の国造名がそのまま令制国の地名になっている点を指摘するとともに、『延喜式』の出雲までのルートが現実のルートとは異なっていたのではないかと考

察している。そして山陰地方からヤマトに至るルートとしては、中国山地を山越えする「山の道」の他に、日本海沿岸を通る「海の道」も存在していたとする。そして『日本書紀』崇神天皇六十年・『古事記』垂仁段の記事や『延喜式』神名帳を検討して、「山陰道」という行政区分は、現実の地域間交流のなかから生まれたものではなく、『古事記』・『日本書紀』のなかに登場する神話・伝承を踏まえて創出された宗教的イデオロギーの産物であると考えたい」と結論づけている。

本書は『古事記』・『日本書紀』・『出雲国風土記』などの文献史料と山陰地方の遺跡・遺構などの発掘成果や出土品など幅広い考古学的資料を用いて十章から構成されている。第一・六・九章が新稿（ただ部分的には旧稿の成果を取り入れている）で他の章は旧稿である。

本書はそれぞれの章では研究史を整理し、そのうえで著者の見解を述べるというスタイルで論旨が展開されている。ただ推論・仮説が若干多くみられるので、この点のこれからの実証が課題になってくる。「おわりに」で著者が「本書は出雲古代史研究の中間報告の書にすぎない」と述べられているように、これからさらなる研究を続け、本書で課題になっているところを深化させれば、著者の構想する出雲古代史がダイナミックに描かれ、独自の出雲古代史論が構築されるものと期待する。

平成二十七年九月三十日受付

うづみ まさとし：淑徳大学 人文学部 教授